

「大東亜戦争での失敗を本当の意味で総括すべきでは？」

平成 26 年 2 月 18 日

● S.K さんからの質問

日本の本当の意味での大東亜戦争に対する総括について質問です。私たち日本人は本来反省すべきだった悪い文化を、軍国主義などのせいにする事で目をそむけ、結果的に今に残してしまっただけではないでしょうか。一例として、シャープなどの液晶事業の失敗があります。上司に対して「ノー」と言えない空気が液晶事業への巨額な投資につながった。それで最近ではシャープ内では相手を「さん」づけで呼ぶようにしているそうですが、これというのは大東亜戦争の数々の失敗の仕方によく似ているわけです。精神論や組織の融和を図るような論説が幅を利かせ、合理的な意見や情報を軽視する。反対する者を解任したり左遷したりという人事を行って、反対意見を封じ込める。そういう「間違った文化」が、政治が悪い、A 級戦犯が悪い、軍国主義が悪いということで生き残ってしまっている。私の身内にもいわゆるブラック企業という中で使い捨て、使い潰しにされている若い人はいますが、それこそが私たち日本人が本当に総括すべき文化なのではないでしょうか。私は靖国に参拝するような人のことを「右翼」という人に囲まれて生活していますが、彼らはそう言いながら、上記のような企業文化の中で働かされていて、そういうのは現実だから仕方がないというような感覚で受け入れてしまっている。そんな若者、というか人が多い現状について、ご意見があればお聞かせください。

● 西田昌司の答え

先の大戦のずいぶん前（19 世紀後半）からヨーロッパ・アメリカが領土・資源を海外に求めて分捕り合戦をするという帝国主義の時代が始まり、日本にも 1853 年にアメリカから黒船がやってきて日本は開国を迫られました。

欧米列強の脅威を感じた日本は外国の技術・文化を取り入れ、「文明開化、和魂洋才」といった言葉も生まれましたが、欧米列強に負けじと構えたために日本も帝国主義に傾かざるを得ませんでした。大東亜戦争では帝国主義同士の戦いとなって日本は負けてしまったのですが、帝国主義に巻き込まれた側面が非常に大きかったのだと思いますし、歴史の必然というものを感じてしまいます。

では日本に反省すべき点はなかったのかといえば、大いにあったのだと思います。日本人は、皆が心をつにして一つの目標に向かって頑張るといったチームワーク力に関しては非常に優れているのですが、そうやって形成された空気に対して異議を唱える者に対しては、異端者^{いゝたん}と見なして排除してしまうところがあります。しかし、そういったいわゆる異端者の意見の中には傾聴に値するものも少なからずあるはずですし、先の大戦時においても状況判断・作戦に関して異端者からの正しい警鐘があったのだと思いますが、そういった意見は全体の流れに逆らう空気の読めない意見だといって切り捨てられてしまい、「おまえは天皇陛下のご聖断に反対するのか」といった具合に逆賊扱いされて誰からも相手にされなくなってしまうのが落ちだったのでしょう。

そうやって異端者を排除して決められた枠内でしか発想をしなくなってしまうのですが、本当の答えはその枠外にあたりするものなのです。先の大戦について言えば、（特に戦争の終わらせ方について）個別具体的に検証すると反省すべき点は沢山あると思います。これは当時の軍国主義が悪かったという話ではなく、形成された空気の前に思考停止をしてしまっただけで誰もそこから抗えずに自由な議論もできなくなってしまうという日本人の性質によるところが大きいのですし、そういった流れに逆らわずに上手く立ち回る人が出世するという日本的組織のあり方がそこにあるわけですね。このような性質は、全体的な流れが正しければ非常に有効に機能するのですが、全体が誤った方向に舵を切ってしまうと一気に破滅の道を歩むことになるのです。

日本人のこのような傾向は、戦後になってますます拍車が掛かったように

思います。先の大戦に関して様々な反省点があったのは事実だとしても、戦後は「あの戦争は間違っていた」と戦前を全否定してしまい、祖国自衛のために戦争に踏み切らざるを得なかったという部分までもなかったことにして先人の苦渋の選択の歩みを日本人自らが一方的に断罪したのです。WGIPを徹底して行ったGHQの東京裁判史観・自虐史観に日本人がまんまと嵌ってしまって、「寄らば大樹の陰」「勝てば官軍」といった情けない風潮が蔓延ってしまいました。

戦後はアメリカ型の社会がいいんだということになり、そういったアメリカナイズされた空気に何の疑問も抱かずに迎合する者が出世して社会の中樞を占めることになりました。もちろんアメリカの全てが悪いとは私も思いませんし、アメリカの古き良き時代には家族や地域を大事にするといった価値観がありました。彼らには日本やヨーロッパのような長い歴史がないという負い目もあって日本やヨーロッパの歴史に敬意を払うといった節度も備えていたように思います。

しかし今のアメリカは、国境を越えて資本やお金を移動させて利益の最大化を追及するといったグローバリズムが席捲して、数の力に物を言わせるグローバル企業が富を独占しています。お金に目がくらんで過去の良き価値観を捨て去ってしまったかのように思えますし、そういった中でアメリカ人自身が疲弊しています。

かつては圧倒的な軍事力を背景に世界の警察官と言われたアメリカですが、今は亡きソ連に代わって中国が台頭してきてアメリカに軍事力・経済力ともに近づこうとしています。本来、アメリカと中国は資本主義と共産主義の究極の対立があるはずなのですが、アメリカ人と中国人はともに拝金主義的などころがありますし、共産主義を掲げた中国が資本主義的な国家運営をして両者ともに経済至上主義に染まっている感があります。

戦後の日本人は、戦前を否定してアメリカの作った占領体制を守ればいいのだと思い込んでしまいましたし、またそういったことに何の疑問も持たな

い人が出世もできたのです。しかし、アメリカの国力が低下している現在、アメリカに与えられた世界観の枠組みの中で思考をしても答えがないということに日本人はもうそろそろ気付かなければなりません。そういった枠組みの外に出て、自分の国は自分で守るという当たり前の国になるにはどうすべきかという原点に戻った議論が必要なのです。

安倍総理はグローバリズムや新自由主義に対抗するためにアベノミクスを掲げてデフレ脱却を目指していますが、これまで日本においても平成の時代に席捲した小泉構造改革を代表とする新自由主義にどこまでの分析と反省がされているのか、不透明な部分もあります。現時点においては二本目の矢の財政出動が功を奏して経済は良くなってきてはいますが、これからが勝負です。グローバリズムに走ったアメリカに盲目的に追随した日本がこれまでに経済政策を誤ったのは明らかなのですが、一度決めた方向からの転換をするのが非常に苦手なのが残念ながら日本人の性質でありますので、ここはしっかりと頭を使わなければなりません。

歴史的な長いスパンと広い視野で物を考えるのが日本人はどうも不得手に感じられます。また、少数派は自分の正しさに自信があろうとも、多数派に逆らって自分の意見を言える人は日本人の中にはなかなかいませんし、どうしても他人の目を窺ってしまうのです。そうやって皆が「なんとなく変だな」と思いつつも誰も声を上げずにそのまま破滅の道を進むというのがかつての大東亜戦争でありましたし、平成の時代に蔓延った新自由主義路線です。そのようなことにならないよう、しっかりとした議論をするのが自民党の責任であると思います。

曲がりなりにも歴史的な長いスパンと広い視野で議論できるのは自民党しかありませんし、残念ながら他の野党には期待できません。彼らがアベノミクスを批判しようともその思慮の浅さゆえに国民には届かずに自民党が高い支持率を得ていますが、自民党の一人勝ちは決して良いことではありません。野党に期待できない分、自民党内での徹底した議論が必要です。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>